

この夏、政治家の引き際について考えさせられる出来事が相次いだ。稲田朋美防衛相と民進党の連舫代表の辞任劇だ。

安倍晋三首相の「秘蔵っ子」と言われた稲田氏は、南スーダン国連平和維持活動部隊の日報隠蔽問題や、学校法人「森友学園」との関係を巡る国会答弁の迷走、東京都議選の自民党候補応援の際の問題発言など話題に事欠かなかった。連舫氏は高い知名度を背景に党勢回復を期待されたものの、党の支持率は低迷が続き、公認候補の離党が相次いだ東京都議選では、旧民主党時代を含めて最低の五議席にとどまった。

いずれも党内から「遅きに失した」との声が上がる。当人は「まだ持ちこたえられろ」と思ったかもしれないが、そうした感度の鈍さが傷口を広げたのは明らかだ。

そういえば、ここ北海道にも「引き際」が取り沙汰される政治家がいる。高橋はるみ知事だ。

二〇一五年の前回選挙で道政史上初の四選を果たし、今年四月に在任十五年目を迎えた。強力なリーダーシップで道政課題の解決に手腕を発揮しているようには見えないうが、稲田、連舫両氏のように問題発言が目立った失策があるわけでもない。にもかかわらずと言うべきか、だからこそ言うべきか、報道機関の世論調査では今なお高

政治家の引き際

い支持率を誇る。

その高橋知事の発言が臆測を呼んだ。七月末に江差町で開かれた後援会の会合で、二〇一九年春に予定される次の知事選への対応について「素暗らしい人がいれば譲る」「いつまでも居座るつもりはない。後継者も育てないといけない」と語ったというのだ。後継者にふさわしい人物がいれば身をひく。何と潔いことだろう。

しかし、話はそれで終わらない。高橋氏はさらに続けてこう述べたという。「後継者にふさわしい人がいないなら頑張らなければと思う」。関係者の中では、この発言こそ高橋氏の本心だと見る向きが多い。つまり、事実上の五選出馬宣言だというのだ。

道庁関係者の解説はこうだ。「五選出馬への意欲をむき出しにすれば多選批判は免れない。いつでも譲るといふ謙虚な姿勢を示しつつ、最終的に『あなたしかいない』という形に持って行けば、反発をかわすことができる」と踏んでいるのではないか」

道内経済界は高橋氏の五選に否定的だと言われる。これまで高橋道政を支えてきた自民党道連も、高橋氏に批判的だとされる吉川貴盛衆院議員―小畑保則幹事長の体制になった。やすやすと五選を許す空気でないことは、誰より高橋氏自身が感じているのかもしれない。そうした焦りが江差での発

言につながったとの見方もある。

とはいえ、知事選と道議選は同じ投票日で行われる。加計学園や日報隠蔽問題で安倍政権が揺らぐ中、選挙日程が近づけば自民党内に高橋人気にあやかるうとする動きも出てくるかもしれない。だとすれば高橋氏の思惑通り。実際に党内には「次も高橋知事ではないのか」という声もある。「誰か出せるならどうぞ出してみてください」。

高橋氏のそんな声が聞こえてきそうだ。一方、知事選四連敗中の民進党（旧民主党）に、今のところ積極的に候補擁立を探る動きは見えない。前回選挙では迷走の末、独自候補擁立を見送り、佐藤のりゆき氏の支援に回った。辛うじて選択肢を示すことはできたものの、一連の混乱は高橋氏四選を許す要因の一つにもなった。次回選挙は道政奪還とともに党の存在意義をかけた戦いになる。

知事選まで残り一年八月分。政治的な駆け引きや思惑ばかりが先行して北海道のリーダーが決まるとしたら、道民にとってこれほど不幸なことはない。人口減少、少子高齢化、子供の貧困、JRの路線廃止問題、北電泊原発の再稼働問題など、北海道を取り巻く課題は待ったなしだ。高橋知事の引き際はやって来るのか。「遅きに失した」では済まされない。

ハ蒼V